



特集
コロナ禍での
御柱祭

上社御柱祭×コロナ

副院長

兼 COCC(新型コロナウイルス感染症対策会議)責任者

文・高木宏明

コロナ禍での御柱祭

関係者の皆さんは本当に悩まれ、葛藤されたことと思います。

昨年夏から秋、感染するとそれなりの重症化率があったコロナ・デルタ株が流行、さてその後コロナはいったいどうなるのか？ 当時誰も分からない中、いろいろな状況を想定して対策を考えねばな

りませんでした。

昨年うちに水面下ではいろいろな準備が進み、そして年が明ければそれこそ元旦から「籤くじでよい柱を引くための祈願＝抽選祈願」が始まります。時に雪がちらつく極寒の境内に、早朝、各地区から大勢の氏子が入れ代わり立ち代わりひしめき集まるのをどうするのか？ 柱そのものの伐採までの準備をどう進めるのか？

の経過の一端に関わらせていただきました。個人的には茅野市豊平某区の区民・氏子として4回目の御柱でしたので、ある程度様子が分かっていることがお役に立てるかもしれないと思つてのことでした。

やるからクラスターが出た、などなど地域では感染にからむニュースが飛び交い、レベルなんとかではトレーラーで運搬と決めていたものの、感染は年末から落ち着く雰囲気、かと思いきや年明けからまた棒グラフが伸び始める…トレーラーの手配だつて、運搬する道の警察へのお願いだつて、「じゃ、明日お願いします」とはいかない。決死の決断だつたのではないかと思います。

「山出しはがまん、でも里曳きはぜつたいにやる」

毎年じゃない御柱は、行われる、だけじゃなくて、引き継がれ受け継がれる。だから今年やらなきゃ次の御柱、どうやったらいいのかが分からなくなる。安全に曳行し建てる知恵や技術が伝えられなくなる。御柱は上の者らから次の者らへ託されることどもの受け渡し

氏子たちの協力のもとに

さて、私は感染対策の部分でこ

コミュニケーションの大事な要素である表情が、マスクで隠れてしまった状態で安全に曳行できるのか不安でした。何しろ御柱では事故が起きれば時に大変不幸な結果を招きます。むしろ多くの者が同じ方向を向いて常に動いている外の活動であれば必ずしもマスクはいらないのではないかと、事故を防ぐためには仕方ないのではないかと考え、そう発言もしていました。しかし、万が一それで感染が拡がり、そのことで重症者が出れば、せっかくの神事に傷がつきます。安全と感染、伝統神事と現代の災厄、どちらを取るのか捨てるのか、大いなる葛藤の末、大総代の皆さんは最後は自分たちの何かを賭けて自ら決断されました。その結果はもうすでにご覧のとおりです。

準備段階から集まりの人数制限

選ばれた柱を見ての各地区での準備。元綱を編み、命綱、追いかけて綱を整え、めどでこ用の木の見立てと伐採・加工、梶子棒てこを揃え本番のための正装(腹掛け・シャツ・ニツカズボン・足袋・法被・身につけるお守りから鉢巻き・etc)をあつらえ…その上での夜な夜なのめどでこ乗り、木遣り、梶子衆ちっば、喇叭隊らっぱの練習、そのための会議・会議・会議…やたら人が集まらね

が行われ、集まりには必ず「健康チェック表」を持参し、飲酒は禁じられ、本番ではマスクが必須とされました。そしてこれだけの規模の行事でありながら、これらの指示は氏子たちに遵守されました。

御柱祭、その後

そして、感染は危惧したほどには拡がりませんでした。若い人たちに実は広く感染していて、軽いか無症状だったために感染の実態がつかまれていないのじゃないか、という観測はあり得ると思います。でもそれでも感染力の強いオミクロン、そこからさらに感染は拡がるはずでしょうし、そうなれば一定の率で中等症や重症の患者さんが発生するはず。御柱に関わった万の単位の人たちに感染が爆発的に起これば、それは必ず地域の感染爆発につながります。

でもそれは起こらなかった。あー、外でやる行事って意外と大丈夫なんだねー、だって、常に360度換気してるようなもんだし、あれだけ密でも、せめてマス

ばすまないぞ、いったいどうすんの？

そしてもちろん本番の4月山出し、5月里曳き。一つの柱当り数千の氏子やらが寄つてたかつて引つ張り、落とし、また引つ張り、渡し、揺らし引きずり、そして建てる。2時間の宴会どころじゃない、朝から晩まで何日もやるんだから。いったいどうすんの？

自粛・自粛、ほら、宴会なんか

クしてればいいんだねー、結局そう結論できちゃうのかもしれないね。



高木 宏明
たかぎ ひろあき

副院長 兼 医療安全管理部長 兼 在宅・地域ケアセンター長。1987年名古屋大学卒。岐阜県高山市厚生連久美愛病院を経て、95年着任。2017年から副院長兼医療安全管理部長兼在宅・地域ケアセンター長。専門は総合診療と在宅診療。

医療面で

御柱祭

を支えた 救護班

—— 当院は御柱祭の救護を担っています。どのように御柱祭を支えているのかを教えてください。

永田 御柱祭の救護は、まず地域の医師会が御柱の実行委員会から要請を受け、医師会が諏訪中央病院、富士見高原病院、諏訪赤十字病院の3つの病院に救護を依頼します。今回の御柱も含め、過去4回程度は本宮を諏訪赤十字病院が担当し、前宮を諏訪中央病院と富士見高原病院が担当しています。

前宮の救護は諏訪中央病院と富士見高原病院からそれぞれ医師1名ずつ、看護師1名ずつの合計4名の医療スタッフがチームを組んで万が一に備えており、建御柱の時は、前宮の鳥居の前の救護所に2人、棧敷席の一角に2人待機していました。

方も少なかつたと思います。また、大人数が集まるといってことで新型コロナウイルス感染症を疑うような発熱患者さんが来ることも想定していましたが、幸い大きな感染の局所的流行、いわゆるクラスターの発生はありませんでした。これはひとえに氏子の皆さんが事前体調確認にご協力いただき、祭の本番でも感染対策に留意していただいていたためと考えています。

—— 新型コロナウイルス感染症対策として救護所が行っていたことはありますか。

永田 私たち救護班は基本的な感染防御をして救護に臨みました。具体的には、マスクの着用を始めとして、ゴーグルや防護服を用意し感染に対する防御を徹底して行いました。また、救護所に来られた人に後日連絡が取れるように連絡先をしっかりと把握するように努めました。これは、救護所に来られた方が後日新型コロナウイルス感染症と診断されたりしたときなどにしっかりと皆さんへ連絡するためです。

今回の御柱祭は新型コロナウイルス感染症の流行により里曳きのみ開催ではありませんでしたが、万が一の事故に備えて引き締め準備をしました。具体的な準備として、過去の御柱祭でどのような事例(外傷や熱中症、発熱など)が多かったか事前に分析し、勉強会等も企画してシミュレーションして臨みました。

—— 救護所ではどのような医療行為が可能だったのですか。

永田 基本的にはケガ人の応急手当を想定していました。例えば手足を骨折してしまつたときに簡易的に固定するために用いる医療器具(シーネと呼びます)や、包帯等を準備しました。また、エマー

—— 最後に地域の皆さんへメッセージをお願いします。

永田 まずは、祭の前の体調確認や現場の感染対策等にご協力いただきありがとうございます。今回の御柱祭は新型コロナウイルス感染症の流行により開催自体が危ぶまれましたが、さまざまな工夫の中で無事開催することができました。御柱祭は当地域で脈々と続く伝統ある神事であり、継続することが重要だと思います。この神事に関する地域の皆さんの強い思いを改めて感じました。病院としても医師会としても、その思いをしっかりとサポートしていきたいということをお伝えしたいです。(聞き手 腫瘍内科医師 門倉玄武)

ジェンシーバッグといって万が一重症の患者さんが搬入された際に速やかに対応できる物品が詰まつたバッグや、多数の方がケガをされたときなどを想定して、トリアージセットを準備しました。(トリアージとは、災害や大規模な事故などで多数の患者さんが一度に発生したときに、色のついたタグなどを付けて重症度別に患者さんを振り分け、治療行為や病院搬送の緊急度を順位づけることをいいます)

エマーージェンシーバッグには、心肺蘇生に対応できる物品も詰められました。重症患者さんの搬入にも備えました。またこのような患者さんの対応では、速やかな病院搬送も重要です。救急隊も諏訪広域連合の消防隊員が10人ほど常駐していました。救急車も前宮の宮川第二保育園の駐車場に2、3台待機しており、重症の患者さんが運ばれてきた際に速やかに病院まで搬送できるような体制を組みました。

—— 今年の救護所ではどのような方が受診されたのですか。

永田 熱中症の方が多かつたのが印象的でした。今年の御柱祭は天候に恵まれたのですが、気温も上昇したため熱中症の方が多くいらっしゃいました。水分を摂って日陰で休息する程度で十分な軽症の方から、中等症以上で点滴が必要と考えられた方もいらっしゃいました。点滴が必要な場合は、点滴をしながら医療機関に搬送となりました。

あとは例年と同様にケガの方が多くいらっしゃいました。例えば斧で手を切つた方や、下肢の肉離れをはじめ、体のどこかを痛める方が多くいらっしゃいました。

—— 今年は新型コロナウイルス感染症の流行下での御柱祭の開催となり、さまざまな工夫の中で祭が行われ、実際山出しや木落し、川越しは実施されないなど変更開催となつたわけですが、救護班の立場から例年と異なつていたことがあれば教えてください。

永田 まずはお祭りに参加した人が少なかつたため、全体として発生した事案、救護所に来られる

諏訪中央病院の救護活動

このような活動を行いました！



前宮前救護所

諏訪広域連合の消防職員がテントを設営して、そこで医師会が派遣した看護師と医師が消防職員と共に活動しました。



前宮境内棧敷席待機位置

諏訪広域連合の消防職員と下見をして、患者さんを搬送する通路を事前に確認しました。



永田 豊
ながた ゆたか
兼 院長 兼 内科系診療部長 兼 東洋医学科部長。茅野市出身。富山大学和漢診療学講座に入学。沼津市立病院、成田赤十字病院、富山大学附属病院、富山大学大学院(医学博士取得)などを経て、2012年より諏訪中央病院。

名誉院長 濱口 實 はまぐち みのる



先日、懐かしい人から連絡がありました。30数年前に勤めていた聖マリアンナ医科大学で乳がんの手術をした患者さんのSさんからでした。あまりにも珍しかったので、すぐには思い出すことができませんでした。30年前に私が中央病院に移ってしばらくすると、ご夫婦で訪ねてきてくれました。一晩一緒に飲んで懐かしい話で盛り上がりました。

このご夫婦が忘れ難いのは、廃品回収業をしてよく働いていたのと、子どもがいなかったので当時3人も里子を養子にもらい、立派に育てて成人させていたからでした。一番上の女の子は大型トラックの運転手をしていて、母親の乳がんを心配していたの思い出します。Sさんのご主人もやさしい人で、子どもたちのことを心から大切に思っていました。

事を引退して伊豆に2人で住んでいるとのことでした。そして、ドック健診でもう片側の乳房にしこりを指摘され、私のことを思い出してどうしたらよいかという相談でした。つい懐かしさにそちらのほうはそっこのけになりましたが、知っている医療施設を紹介して、精密検査を受けることを強く勧めました。

30年の間をあけても心の片隅にあった私のことを思い出して頼ってくれたことに感激しました。人と人のつながりはいつまでも切れることなくつながっていくものだということがよく分かりました。

この話を書くころと思ったのは、熊本の『赤ちゃんポスト』に預けられた3歳の子どものニュースでした。5人の子育てが終わったご夫婦がこの3歳の子どもを養子に迎えて18歳になる現在まで立派に育

New!

第1回

● ● ● 認定看護師からのチョットいい話 ● ● ●

認定看護師の連載がはじまります

緩和ケア認定看護師

平出 明日香 ひらい ありあけ



皆さんこんにちは！

今号からこの場所のコラムは、認定看護師が担当していくことになりました。

「...? 認定看護師ってどういう看護師ですか?」

そう思った方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

認定看護師は「救急看護」や「感染管理」などの21分野に分かれており、各分野を専門とした看護ケアのスペシャリストです。それぞれの疾患の予防から、疾患を持つ患者さんとご家族の困りごとや生活についてまで、より詳しくご相談にすることが出来ます。

そんな認定看護師ですが、諏訪中央病院にも12名が所属しています。専門分野や配属部署はそれぞれ違います。その12名で交代してコラムを担当させていただきます。

地域の皆さんに、このコラムを



認定看護師は皆さんのお困りごとに、笑顔で対応します

通して認定看護師の活動を知っていただき、各専門分野からの「チョットいい話」をお届けできたらと思っています。

それでは、次回からのコラムを楽しみにお待ちください！

福祉避難所の稼働に向けて

まちの減災ナース看護師

みやざわ ひでのり 宮澤 英典

今回は福祉避難所について少しお話しします。大きな災害時に開設される避難所があることは皆さんもご存じだと思います。この地域では、小中学校や公民館などです。有事の際に生命を守るために、万人が避難をすることに制限はありません。

しかし、近年の大きな災害や実際の避難所開設の経験から、身体に障害をお持ちの方や在宅で特殊な医療機器を使用されている方などが避難された場合、避難所での生活は大変過酷なものとなり、たくさんの方の支援や配慮が必要となること分かりました。車いすの方が仮設トイレを使えない、体育館の段差を乗り越えられないなどわずかな動作に支障をきたすことは容易にイメージができるでしょう。結果的には避難生活によって体調を崩されたり、在宅での

酸素や胃薬などの管理が継続できず病院へかかることになってしまいます。

災害時に誰かの助けを必要とする方々を「災害時要支援者」といいます。この方たちが、避難を強いられた際に、安全と最低限の生活が保障されるよう見直され福祉避難所の開設を国が義務付けました。例えば、当院のある茅野市では市内6カ所にある温泉施設が福祉避難所に指定されています。課題も多く実際に受け入れ態勢を作るには、行政をはじめたくさんの方の関わりがないと機能を発揮できないことが分かりました。茅野市ではワーキンググループを設け、行政、福祉、医師会、保健師、看護師らが協力し福祉避難所の稼働に向け「共助」が動きはじめたところです。有事の際は、住民一人ひとりの生活と

第10回

● ● ● 365歩の日々 ● ● ●

介護老人保健施設 特別養護老人ホーム

やすらぎの丘・ふれあいの里

日常と作品

ほっこりな



御柱祭にちなんだ催しや田植えなどに興じ、元気に過ごされています。精力的に活動している様子を少しだけご覧ください。



原村のラップ隊の方たちが御柱の木遣りと演奏を行ってくださいました。感動して泣かれている利用者さんもいらっしゃいました。木遣りの掛け合いも上手でした。



水彩絵の具をスポンジにつけて皆で「ポンポン」して使ったあじさいです。鮮やかにできていますね。

やすらぎの丘も建て御柱のお菓子で健勝をお祈りして、美味しくいただきました笑



正面にはあじさいを、フロア全体には藤の飾りをつりました。皆さんお越しの際には上を向いて歩いてみてください

梅雨でも楽しく♪



「雨が降って紫陽花華やぐ」折り紙で丁寧に作られています♪



毎年恒例のバケツ田んぼに田植えを行いました。大きくなりますよーに。

広告を利用した環境に優しい鯉のぼりです。フロアやカレンダーにたくさん泳いでいます~♪



たんぼたんぼ☆



手術センター看護師 三ツ井 恒介さんの回

医療の現場は日々忙しいイメージ。そんな中でお昼ごはんのひとときにお邪魔し、色々な角度から人物像を探るコーナー。

手術センターではその名の通り日々、手術を行っております。配属されて2年目になる三ツ井さんの業務は、必要な器具を揃えたり、術中の記録を取ったりとさまざまな場面に携わっています。医療ドラマでよく見る術中の医師に器具を渡すシーンというのも実際にあるそうです。

心掛けていることは患者さんが安心して手術に臨めるようにすること。患者さんの術前訪問にできるだけ足を運び、手術の流れを話したり不安解消に努め、術後にも体調に変化がないか訪問をします。担当する手術は平均で1日2件、7〜8時間に及ぶものもあるとのこと。患者さんのために奮闘しています。

そんな三ツ井さんのお弁当は手作り！前日の夕飯と一緒にレシピを調べ、試行錯誤しながら作っているそうです。料理は得意じゃ

ないと話していましたが、炊き込みご飯とおかずでとても手が込んでいます。料理もできちゃう器用な青年です。

多忙な毎日を送っていますが休日には洋服が好きでいろいろなお店に買い物に出掛けたり、美味しいものを食べに巡っているんだとか。出掛けることが好きなので今度は友達と海に行こうと計画中だそうです！

これからさらに暑くなりますが、熱中症などに気を付けながら三ツ井さんのように外出したりと束の間の時間を楽しく過ごしていきたいですね。暑さでうつかりお弁当が悪くならないように注意しましょう(笑)。



メディメシ…「メディカル・スタッフ(医療従事者)のご飯」の略

諏訪中央病院
YouTubeチャンネル

フレイル予防体操、始めてみませんか!?

いつまでも元気に暮らし続けたい。そんな皆さんを支えたい!

諏訪中央病院リハビリスタッフは、持っている知識を生かして皆さんの元気を支えるお手伝いをしていきたいと思っています。今回は、転倒予防・腰痛予防・肩こりや血行改善・認知予防などたくさんの内容を盛り込んだ体操『玉川体操』を作成しました。当院の公式YouTubeチャンネルでご覧いただけます。

毎日続けてフレイル予防、やりたいことを続けられる元気な体をみんなで作りましょう!

閲覧はパソコン、スマートフォンから

YouTube

諏訪中央病院

毎日続けて
フレイル予防!
玉川体操



QRコード



諏訪中央病院
Suwa Central Hospital —あたたかな急性期病院—

〒391-8503 長野県茅野市玉川4300

電話 (0266) 72-1000 (代)

FAX (0266) 72-4120

E-mail byosin@suwachuo.jp

HP www.suwachuo.jp

ご意見・ご感想を
お聞かせください

基本理念

やさしく、あたたかい、たしかな医療を目指す

医療目標

1. 充実した救急医療
2. 安全な医療
3. 患者さんの権利を尊重した、思いやりのある医療